

中島広足往来抄(六)

白石, 良夫
北九州大学講師

<https://doi.org/10.15017/10522>

出版情報 : 文献探究. 8, pp. 50-55, 1981-06-07. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

中島広足往来抄(六)

白石良夫

本誌第2・4・5号の三回にわたって使用した資料『^{自寛五年}至同七年詠草』は、文政五年六月より同七年春までの、いわゆる歌日記なのであるが、そこに記された歌どもは、広足の熊本におけるそれであった。この間、広足は左のごとく五度旅に出ている、その旅中のことは、それぞれに紀行が備わっていて詳しい。

文政五年十月三日く十一月九日

長崎行。『夢路日記』

文政六年二月二十五日く三月九日

江戸行(ただし、途中で引返す)。『ふなぢのなやみ』

同年五月十五日く七月二十四日

長崎行。『後夢路日記』上

同年九月六日く同月二十一日

長崎行。『後夢路日記』下

同年十一月十六日く十二月十三日

長崎行。『浦のしるべ』

今回より、右『詠草』に省かれた旅行中における広足の交遊録を複製することにする。

(四十) 岡部春平・轟広洲・網田屋・中島広行・吉永直雄

・渋江加津麿・深崇寺・楢林公足・みす子・彭城杖
平・聖福寺・福濟寺・あかけや・伊奈御楯・西紀麿
・井上清麿・西村気風・青木永章・青木永古・藤木
屋・小川某・南桂・伊藤常春・衛藤若蔵・するがや
・祇園社・清水寺・二葉屋

まずは、文政五年十月三日より十一月九日にかけての長崎行き
の紀行『夢路日記』から、自筆本が国会図書館の蔵する所となっ
ている。大本一冊、共表紙・表紙左肩に「夢路日記 草稿 / 文政五年冬」と書ける。墨付二十四丁、うち一丁は序文、その末に「みるがうちのことろたひらのうみつらもさむればゆめのわたりせけり」の歌を添える。さて、該書は弥富破摩雄氏旧蔵本であるが、同氏編『中島広足全集』には所収されていない。その理由を、氏は「乱書、塗抹甚シクテ到底読シ難ク、此レヲ省略セリ」と言われ、言われるごとく、清書本として残っている他の広足紀行類に比すれば、該書は、いまだ草稿の段階とすることができると言える。

① 岡部春平・轟広洲

肥前の國長崎の濱は、比しど行見まほしうおもひ□□つる
を、某道吹かた(わづかに)三十里にもたらぬほ(はず)。比し
たははひわたるほどなれど、都あたりの行かひぢに呼ばら(た

ぐへては、いとたやすかなるこゝちしてうち過し來ぬるほどに、中々とし月をなんへにけるを、いにし月のなかば、轟廣淵が、しこにいたりて、かへりきてものがたれるをさくに、ちくぜんの国(くになる)岡部春平なん、かれしに「此春の」はじめつかたよりかしこにいたりぬて、やがて其さとにすみつきにけりと、いへば「いへば」「いふに」、たより出來ぬるこゝちすれば、そをとぶらはんとおもひたちて、にはかにたびよそひするは、文政五とせといふとしの十八神無月三日の日也けり。(ニオ)

本文の冒頭である。春平がこの年の「春のはじめつかたより」長崎に住んでいることを、九月なかば長崎より帰った広淵から聞いて、長崎行きを奉行するのである。実にこれが、以後広足の生涯と深く関りを持つ長崎への初めての旅であった。(一三) [37] (本誌第5号)の春平宛て広足書翰は、この出発の直前十月一日にしたためたものであった。

② 網田屋・轟廣淵

前項に直接続いて次のごとくある。

くれつかたより出たちて、一里あまりにて高橋のみほとにいたる。こゝより舟にていたりぬるに、やがてこよひたよりの舟(へのたより)あなりといふもいとうれしくて、時をまつほど、廣淵もこゝまでおくりきて、行かたのあないどもくはれくすれば、わかれの酒などのむに、やうくよもふけゆく。

めづらしきから国人も行て見ん君がしるべの道のまに

かくながら君をもたゞにともなはざり行べきたびはらましをなど、うちおもふまゝをいふに、廣淵も何とかやかへしたれど、心いそぎのほどにてわすれにけり。かくて廣淵かへりて後、しげしやすらふほど、(後略) (ニオ)

「高橋のみほと」は、島原の対岸にある漆町。この町の「網田屋」なる船宿は、広足が長崎に行くときよく利用していたらしい。ところで、右の文に拠れば、熊本を出るのが十月三日の夕方、その日のうちに夜船に乗って島原に渡るのであるが、前掲「詠草」(一九オ)に、「神無月二日に高橋のかたにものしてノ霜さえし小田のをしねもおしなべてかりなきわたる神無月哉」とあって、その前日にも準備のためであろうか、広足は高橋へ行っている。

③ 中島広行・吉永直雄

翌四日の記事に次のごとくある。

湯江村を過れば、多比良村也。こゝに四面宮といへる社のあなる、此宮のはふり植木長門といへるは、我友吉永直雄がをしへ子にて、はやうれれる人なれば、たづね行て、よのかたりす。やがてわかれて「け小は」あいづあたりまでとおもひつれど、しみてとゞむれば「るに」舟のゑひこゝちもなほさわやければ、こよひはこゝにやどらんとさだめて、何くれの物がたりす。(中略)此よ、此あたりのことども何くれとあるじにとひきまつる中に、めづらしとおほゆるかざりは、やがてしるしとゞめぬ。(三ウ・四オ)

以下、五丁オまで聞書きを記す。「植木長門」は中島広行のこ

と(既出)。吉永直雄についても既出であるが、その伝は、上妻博之氏(肥後文献解題^四)に拠ったので、没年等の詳細は不明であった。いまここに、その子吉永千秋の伝「吉永賢木園翁伝」^(五)に拠って知り得たところを記すと、直雄は松崎直辰の三男にして、通称嵩、また次兵衛。後、藤崎八幡宮洞官吉永秀雅に養われ、家職を継ぐ。晩年、秀俊と改名。天保十年十月十一日没。

4 中島広行

五日、たつの時過るほどより、長門が家をいで、土黒村・神代村などを過て行。(後略)

(五才)

5 淡江加津麿・岡部春平・深榮寺・楳林公足・みす子

翌六日は、日見峠を越えて長崎の町に入った。

伊セ町といふを過、水神宮の神司淡江加津麿がりつさぬ。こゝに春平あればなり。をりしも春平君家において聞、よろこびつゝ立出てむかひ入る。まづその夏わかれつるより後の物語ども、かたみにくづし出てつきすべくもあらず。さて、夜にいらては、此宮の南なる深榮寺といふに、春平にともなほれ行て庭の菊を見る。あるじのほうし酒す。む。「あす、こゝにからん来りて菊を見るべければ、此花とともに名をつけて、歌をも」といふ。春平・公足・みす子・おのれ、四人してよむべしと也。

(六才く六ウ)

淡江加津麿は、河内町水神社第七代神職。名は真興。文化元年から文政六年まで在職する。なお、春平が一時淡江姓を名告るのは、加津麿の養子と成って、同社八代の神職を継ぐからである(文政六

年く同九年^(五))。深榮寺は東林山。寺町通りにある真宗寺院。「公足は、後夢路日記」に「楳林公足」とある。楳林姓は代々オランダ通辨の家として著名であるが、渡辺庫輔氏「阿蘭陀通詞楳林氏事略」(「崎陽論叢」所収)にはその該当者を見出し得ない。

6 岡部春平・彭城秋平・聖福寺・福濟寺・あかしや

七日、人々来りて物語す。夕つかた春平・秋平ともなひて、町うへぬち寺々行めぐり見る。左のかたにては、聖福寺・福濟寺など也。夜に入ては、うかれ女のすむさしくを行めぐり見る。あかしやとかいふにて酒たうべぬ。

(六ウ)

「秋平」は、十日の記事に「彭城秋平」とあるも、伝未詳。聖福寺は山号万寿山、風頭山の麓にある黄檗宗の寺院。福濟寺は山号分紫山、同じく風頭山の麓にある黄檗宗寺院。「あかしや」は未詳。

7 あかしや

八日は舟遊び。オランダ船ほど見物したあと、日もしにかたぶさぬれば、もとの梅がさきにつけて舟をおり、おのくうちつれて、さらにあかしやにいたりてやすうひ、日くれてやどりにかへりぬ。

(七オ)

8 伊奈御楯

九日、昼つかた、松森天神社神職(主)伊奈岩(石)見助御楯がりとひて、しほしものがたりす。「かざろひ考」といへるもの書つるよしかたる。いまだしたかきのまゝなればとて、えとり出す。

(七オ)

伊奈御楯は、伊奈建彦のことか。安永七年十二月、松森神社神主の

家に生れる。広足より十四歳の年長。宣長に学び、長崎に帰って家職を継ぐ。弘化二年八月二十九日没、享年六十八。文中のその着かざうひ考は未詳。

9 西紀麿・井上清麿・彭城秋平

十日、やどりにありて書どもよむ。夕つかた、西吉大夫〔紀麿〕・井上清麿・彭城秋平など物語にきたりせんとてきつ。(七ウ)

西紀麿・井上清麿、未詳。

10 西村氣風

十一日、昼つかた、西村氣風きたれり。けふもひと日やどりにあり。(七ウ)

西村氣風、未詳。

11 彭城秋平

十二日、秋平きたりて繪かく。おのれも歌ほどかきぬ(七ウ)

12 青木永章・青木永古

十三日、申の時より、諏方社の神主青木丹波守永章がもとにいたりて歌よむ。酒肴てうじてすめらる。(歌八首省略)

酒肴てうじてすめらる。歌ども講じはて、永章ひは、子の永古さうの笛あそべり(る)。(七ウくハオ)

青木永章は既出。永章の名はこの日の記事が初見。永古は永章の子。文化四年生れ、広足より十五歳年少。のち諏訪神社大官司となる。慶応三年八月二十六日没、享年六十一。

13 藤木屋・小川某・南桂・伊藤常香・衛藤若蔵・するがや・祇園社

清水寺・伊奈御楯
十四日、西濱町藤木屋に(と)いふ(へる)にやどりをる小川某(を)とふ。こは肥後の人。南桂といへる画師、江戸より来りるにありて、かける画など見る。又其(あ)は(り)たりに、伊藤常香とて、京の季鷹がをしへ子のあなるをとふ。かくて、吾国の画師衛藤若蔵といへるが来りるに、けふあすかへらんとするに、故郷への文ことづてんとおもひて、其やどりと行に、道にて行あひたり。茶の道をなりと、するがやの某(は)どもともなへり。やがて、けふかへるよしいへれば、やがて、道にてふみかきてつく。夕つかた、祇園社・清水寺などにまうづ。(中略)がへさに松のもり伊奈御楯がり行て物語す。(ハオくハウ)

「藤木屋」「小川某」するがや「祇園社」、未詳。伊藤常香は、丸山季夫氏紹介の「瓊浦集人名之内」には、「太兵衛 築町菓子屋」とある。清水寺は長崎山。八坂町にある真言宗寺院。衛藤若蔵は肥後藩抱之の画師衛藤家ゆかりの人物であらうが、若蔵なる人物については未詳。南桂は「文苑名録」(安政四年刊)に画師、常陸下館住人「南桂」とある人物であらう。

14 榎林公足・西紀麿・西村氣風

十五日、昼のほど、公足・紀まろ来れり。夕つかた、公足がり行て物語す。紀まろ・氣風なども来あひぬ。おのく歌よみかはす。(ハウ)

15 西紀磨・西村氣風・植林公足・岡部春平・二葉屋

十六日、よべ、雨少しふりてはれたり。紀磨・氣風来りて物語す。夕つかた、公足来れり。申の時過る比より、公足・春平ともなひてこ、かしこせうえうす。二葉屋とかいへるにいたりて、そいふものをくらふ。夜は公足が家にてものがたりす。

(ハウ)

二葉屋、未詳。

16 岡部春平・伊藤常香・みす子・植林公足

十七日、昼つかたより、春平ともなひて、伊藤常香がり行て物語す。夕つかた、みす子がりはじめて行(とふ)。夜は、例の公足が家にいたりて、『古今集』の序講説す(せり)「をとさぬ」。阿蘭陀の国の酒す、めうる。こきうすさまぐ(にて、こちたき名どもせき。

(ハウ・九オ)

【註】

1 同名の紀行が、文政七年にもある。(『中島広足全集』第一篇所収)

2 『中島広足全集』第一篇・六五頁。

3 『後夢路日記』にも所見。

4 宇野東風氏筆、『肥後先哲偉蹟・後篇』巻五所収(三八八頁)。

5 『長崎市史・地誌篇神社教会部』一一〇頁。

6 『国学史上の人々』所収。

7 姓は墨で塗り潰してある。

【索引】

ア	青木永古	〔四十〕	12
	青木永章	〔四十〕	12
	あかしや	〔四十〕	6
	秋田姓吉	〔三十六〕	7
	阿蘇惟馨	〔二十一〕	〔二十一〕
	阿蘇惟敦	〔二十一〕	
	網田屋	〔四十〕	2
イ	池十別	〔三〕	39
	石川執	〔三十三〕	
	井芥菜	〔三〕	15
	伊藤常香	〔四十〕	13
	伊奈御指	〔四十〕	8
	井上清磨	〔四十〕	13
	芋栗園	〔四十〕	9
ウ	上野光考	〔三〕	15
	内海真道	〔三〕	32
エ	衛藤若蔵	〔三〕	27
	衛藤蟠谷	〔四十〕	13
オ	大石真磨	〔二十一〕	
		〔三〕	26
			33

岡部春平	(三) 22 23 37 44 (四十)	高本紫須	(三) 7	藤木屋	(四十) 13
岡松某	(三) 8	竹林某	(三) 17	藤崎宮	(三) 13
小川某	(四十) 13	知足寺	(三) 9	藤村光鎮	(十五) 15
河上健雄	(三) 3 46	吐月亭	(三) 20 31	二葉屋	(四十) 15
祇園社	(四十) 13	韓広淵	(三) 37 (四十) 1 2	古人	(三) 45
北島清之助	(三) 45	中島広行	(二十七) (四十) 3 4	本間素当	(三) 6 10 14 24 25 28 29 30
木山直秋	(三) 2	長瀬真幸	(三) 18 30 42 (四) (五) (六) (七) (八) (九) (十) (十一)	峯喬	41 45 (二十四)
近藤光輔	(三) 22 40		(十二) (十三) (十四) (十五) (十六) (十七) (十八) (十九)	みす子	(三) 23 (四十) 5 16
斎藤彦磨	(二十五)		(二十) (三十二)	明内寺	(三) 12
彭城秋平	(四十) 6 9 10		(二十三)	本居大平	(一) (二)
坂本秋郷	(二十八)		(三) 22 (四十) 5 14 15 16	山本三春	(三十二)
佐佐木弘綱	(三十五) (三十六)		(四) (八) (十二) (十三) (十八) (二十) (二十四)	横田厳正	(三) 35
渋谷加津磨	(四十) 5		(十九) (二十一) (二十四)	吉永直雄	(三) 4 47 (二十六)
浄土寺	(三) 16		(四十) 13		(四十) 3
聖福寺	(四十) 6		(四) (十) (十四) (十五)		(三) 5 49
浄妙院某法師	(三) 13		(二十) (二十九) (三十一) (三十一)		(三) 47
深崇寺	(四十) 5		(四十) 9 14 15		(三) 1 15 21 31 34 48
杉谷行直	(二十一)		(四十) 10 14 15		(二十二)
すゐがや	(四十) 13		(三) 43 45		(三) 19
清家堅庭	(三十八) (三十九)		(三十四) 6		
清水寺	(四十) 13				
高岫某	(三) 38				

— 北九州大学講師 —